

中学校「国語科」新教科書の脱皮

——五社五種を比較調査して——

武 山 隆 昭

はじめに

平成十四年四月から、小学校・中学校の新学習指導要領が一斉に実施となった。既に、学力低下などの問題が取り沙汰され、国民の関心も高いのであるが、私は「国語科教育法」を担当している者として、新指導要領に基づいて編集された中学校用「国語科教科書」五社五種（新教科書と称する）を比較調査することから、新指導要領下の国語科教育について気づいたことを指摘してみたい。

よく「教科書を教えるのではなく、教科書で教えるのだ」と言われるが、国語科の場合は教科書の出来不出来が授業の出来不出来に直結すると思われるので、新教科書の出来栄えが気になるのである。夏休みに計十五冊を購入し早速比較してみた。第一印象は、「中学校国語科新教科書は一皮むけたな、脱皮したな」というものであった。今まで、指導要領は変われど（指導要領自体もあまり変わり映えはしなかったが）教科書はほとんど変わらずといった状況が三十年続いてきたので、今回はよくぞここまで来たという驚愕の思いで読んだ。

平成八年八月の文部大臣の諮問をうけた「教育課程審議会」は、完全学校週五日制に対応する「学習指導要領」の改訂案を平成十年七月に答申した。その答申を受けて、戦後第七回目の「学習指導要領」が小中学校は平成十年十二月十四日、高等学校は平成十一年三月二十九日に、時の文部大臣有馬朗人名で告示された。答申の中に示された、「受験競争の過熱化」「いじめ・不登校」といった教育現場の問題への対処の他、「国際化・情報化」「環境問題」「高齢化・少子化」といった社会情勢の変化に対応出来る教育を指向して、「ゆとり」の中で自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本としているのが特徴である。

* 今回の改訂の基本的な考え方

- (1) 教育内容の厳選と基礎・基本の徹底
- (2) 一人一人の個性を生かす教育の推進
- (3) 豊かな人間性とたくましい体をはぐくむ教育
- (4) 横断的・総合的な指導を推進するため「総合的な学習の時間」を設けること
- (5) 完全学校週五日制を導入すること

〈特に国語科では次の各項目を強調している〉

- (1) 言語の教育としての立場を重視する立場から、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てる。
- (2) 豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成する。
- (3) 自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力を育てる。
- (4) 目的に応じた確に読みとる能力や読書に親しむ態度を育てる。

中学校の指導要領で、平成元年版（以下前要領と略称する）とのもっとも大きな変化は、「二領域一事項」から「三領域一事項」へ（各学年の目標も三領域に対応）の変化である。これは、日常の言語生活の中で「話すこと・聞くこと」とは、表現行為と理解行為とに分離して意識しないという実状に合わせたものである。すなわち、前要領では、「A

表現」・「B理解」・「言語事項」となっていたのが、新要領では、「A話すこと・聞くこと」・「B書くこと」・「C読むこと」・「言語事項」となったのである。

ちなみに、「言語事項」は、(1) ①、「音声言語に関する事項、音重・調子・間の取り方」。②、「語句の意味」。③、「語彙及び語感」。④、「文章及び文の法則」。⑤、「単語(品詞論)」。⑥、「話し言葉と書き言葉の違い」。⑦、「共通語と方言の役割及び敬語」。(2) 漢字に関する事項。(3) 書写に関する事項。という構成になっている。

平成十四年四月から全国で使用されている、中学校用「国語科教科書」は、前指導要領準拠の教科書を出版していた五社とまったく同じである。

701/801/901	東京書籍『新しい国語』	……………略称「東書」
702/802/902	学校図書『中学校国語』	……………略称「学図」
703/803/903	三省堂『現代の国語』	……………略称「三省」
704/804/904	教育出版『中学国語 伝え合う言葉』	……………略称「教出」
705/805/905	光村図書『国語』	……………略称「光村」

右五社の一年から三年用までの計十五冊を対象として比較考察を進める。その際、必要に応じて平成六年の拙稿^①の指摘と比較することがある。なお、実名を使っているが各社の優劣を比較することが目的ではなく、ましてや特定の社の教科書の拡販に資する意図などは全くないことを明言しておく。

本稿を読んでくださる中学校の先生方には、自校で使用している教科書が採り上げていない項目を、他社の記述を参考にして補っていただければありがたいと思っている。

一、「話すこと・聞くこと」に関する記述

新教科書が、従前の教科書と最も大きく異なるのは、「話すこと・聞くこと」に関する記述の充実である。今まで、音声言語には一部を除いてあまり触れていなかった各社が、こぞつて多くのページを当てている。それは、新指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の1(2)ウで、「A話すこと・聞くこと」の指導に国語科の授業時間の「一〇分の一から一〇分の二程度」を割り当てるように示されていることに対応したものである。その概要を表Iで見よう。

まず、「発音・発声」の項では、東書が一年の巻頭詩に続いて「楽しく声を出す」という題で、大きい声を出し、声に表情をつけるなど、発声練習をすることを課している。中学生になった当初から活気ある教室にしたいという編集者の意図が窺われる。学図一年では、「声を出す」という題で、肩の力を抜いてリラックスして声を発することを勧めている。二年でも「声を見つめる」という題の解説文を載せ、「言語事項」の音声に関する基礎事項の説明をしている。三省二年では、巻末の資料編で「ことばの世界」の「1発音と発声」で呼吸の練習から母音・子音の発音練習まで基礎的な練習をするコーナーとなっている。光村一年でも、巻末近くに「言葉を考える―発音の基本」と題して、短歌や俳句の音数律は、日本語の発音の基本が一音一拍であることに起因することを説明している。これも「言語事項」にも入れることができる項目である。

「話すこと」の指導の手はじめに、自己紹介や何かをクラスで紹介するスピーチを課しているのが、東書・学図・教出で、三省・光村はスピーチの会を開くことを課している。

スピーチの次の段階として、多くの聴衆に対してわかりやすく話す「パブリックスピーキング」の方法や留意事項と実践の指示が、三省・教出を除いた三社にかなり頁を割いて述べられている。特に、東書一年では、「話す・聞く1」という単元を設定し、「分かりやすく話そう」の表題で、①文を短くして話す、②全体像を先に話す、③項目を立てて話す、という小項目を立てて計五頁で説明した後、「課題 次の中から一つ選び、話す相手や状況を想定しながら、それに適した説明の仕方で、分かりやすく話してみよう。」として、1から6までの課題を出している。例えば、「3 クラスのみんなが知っている場所について、名前を出さずに、学校の正門からの道順を説明し、それがどこにあるか当ててもらおう。」というものである。東書三年では、「話す・聞く1プレゼンテーションをしよう」という単元を掲げている。

インタビュの仕方についての項目は、教出以外の四社が取り上げている。「相手を決め、予約を取り、事前に情報を集め、質問事項を整理し、練習をする。本番での注意事項。事後の整理。」というように手続きを説明した後、例を挙げている社もある。

話し合い・討論・会議の仕方については、五社ともに採り上げている。例えば、光村一年では、「意見交換会をもとう……グループ・ディスカッションをする」と題して、話し合いの基本事項（司会者の心得・発言するときの注意・聞き手の留意点）や実例を示している。

また、パネル・ディスカッションやシンポジウムについても五社ともに採り上げており、新しい傾向である。平成元年版指導要領対応教科書では、各社とも「ディベート」までで、組織的な討論会までは採り上げていなかった。ところが、今回の改訂で「A話すこと・聞くこと」が新設され「話し合いが目的に沿って効果的に展開するように……」などの記述に対応するべく各社共に力を入れている。例えば、教出三年で「容器を考える パネル・ディスカッション

表Ⅰ「話すこと・聞くこと」に関する記述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
発音・発声	2			3	4		2	2					3		
分かりやすく話す(話すことの基礎)	8														
自己紹介・スピーチ	1	1	1	2			8			2	2	2	4		3
説明・パブリックスピーキング				2	5								5	3	
プレゼンテーション、発表会を開く			8							9					
対話・インタビュー	10			4			16						5		
話し合い・討論・会議	9	9			5	2	2			7			4	2	8
ディベート、説得				2	2	2				9					5
パネル・ディスカッション *			9				3	7	8		8		5	3	
聞く(声を受け止める、メモを取る)	2	8	9	2			1	1	1						
ポスターセッションをしよう							7								
ニュース番組を制作しよう		8					8								
対話劇を体験しよう							6								
朗読会を開く、朗読劇を楽しもう							1			1					
話のリレー								2							
物語を伝え合おう(まとめ方の工夫)													5		
ブックトーク(本の紹介)			1				4						3		
ブレーン・ストーミング				2											
句会(俳句の批評会)					2										
討論のいろいろ(紹介文)・方法	2	2						2						2	

*シンポジウムも含む、三省1年は、「討論ゲームをしよう」

表Ⅱ「書くこと」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
わかりやすく書く	9									6			3		
題材を選ぶ、課題を見つける	2									1	1		3	2	
情報を集め、整理する(情報吟味)	2			2	2	2				8					

中学校「国語科」新教科書の脱皮

材料を集める、構成を工夫する	1	2				2	1	3	4	
根拠を示す、論点を明確にする	4						4			
推敲する	1					1	2		5	
原稿用紙の使い方と推敲の観点	2	2	2		4	2	1			
評価（互いに読み合う）	2					1				
心をこめて書く		2								
表現の仕方を工夫して書く（比喻等）			2			2	1		2	
多角的に見る			2							
文章の組み立て（頭括型、三段構成）						2				
文章のいろいろ									4	
手紙・はがきの書き方	2			2	2			4		
時を越える手紙		5								
論理的な文章の書き方（説得力）	1	1				7			3	
報告・レポート、調べたことを文に	9				10	7		4	4	6
集めた情報をもとに意見を書こう	8						2		4	2
睡眠について調査し考えを書こう						2				
感想文を書く								2	4	2
題名について考えたことを書く						2				
新聞(本、カセットブック)を作ろう	6				5					6
グループ雑誌を作ろう						8				
ガイドブック・パンフレットを作る		9		2	10					
コピーライターの技（発想）			2							
プレゼンテーションのための資料		2								
主張を書こう、立場・意見を決めて		8			2	6	8			
体験を伝え合う、知らせる、紹介する			3			9	6	2		5
自分を見つけ自分を述べる文章を書く					5			9		
自分を見つめ直す文章を書く							6			
「私のアルバム」を編む										4
物語ふうの文章を書いてみよう				3				2		
随筆ふうの文章を書いてみよう								2		
読書郵便(感動した本を紹介する)						5				
漫画が開く言葉の世界　オノマトペ					2					

せりふと書き (漫画を使って)				2				
言葉ノート、学習の記録			1	1			2	
読書の記録を残そう、読書感想画				1			1	
実験や研究や体験の記録を残す						8	4	
研究報告書を作ろう							6	
話の続きを書く						2		
枕草子と立場を変えて「春は桜…」						2		
変わり身の上話(我輩は犬である)				2				
聞き書き (聞いたことを文章に)								1
ことわざを入れて文章を書く						2		
ことばでスケッチ				2				
アンケートをしよう				2			2	
案内状・招待状を作ろう				2				
わたしの歳時記を作る					2			

ン」という九頁からなる文章を掲載している。クラスを「びん派・缶派・ペットボトル派・紙パック派」の四グループに分ける。グループごとに話し合つて、根拠を調べまとめる。

予想される質問や反論を想定して対策を考える。各グループの代表者がパネリストになる。座席の配置図や進め方まで具体的に示してあり、テーマさえ決まればどのクラスでもパネル・ディスカッションをすぐに実施できそうである。また、光村3年では、一九九八年十一月三日に開かれた「日本語シンポジウム」で司会を務めた小池保氏の発言の記録「日本語は乱れているか」を4ページ掲載した後、「シンポジウムを開こう」と題して準備段階からの手順を記している。

「聞くこと」の指導用に独立した教材を用意しているのも、新教科書の特長である。例えば、学図一年「話す・聞く2」声を受け止める「聞く」と題するコラムで、話し手が話しやすくなるために聞き手はどんなことを心がけたらよいか、メモの取り方、などについて述べている。三省一年では、「表現コラム2 話し合いの仕方」の中で「③聞くときに心がけること」として三項目挙げている。

二、「書くこと」に関する記述

「書くこと」の指導は、従来「作文指導」の意に解されていたが、新教科書では各社ともいろいろな工夫を凝らし、広範囲にわたるさまざまな文章を書き、作品を作るように求めている。

表Ⅱの上から十三項目までは、「文章の書き方」の一般的事項である。まず、題材（主題）を決め、書く材料（情報）を集める。材料を吟味して、並べ方（構成）を考える。原稿用紙に書き、読み直して推敲する。出来上がった作品を互いに読み合い、評価し合う。以上のような作文作成の基本プロセスは、中学低学年できちんと指導しておきたい。この点では、東書1年が最も充実している。次に、表現の工夫や多角的に見る必要性、用語は厳密に定義してから使う、などの付帯的注意事項が掲載されている。これは社によってまちまちである。

十四項目「文章のいろいろ」は、光村三年が、わたしたちの身の回りにはいろいろな形式の文章があり、それぞれの目的に合わせて書かれていることを示し、修学旅行を素材として「紀行文」「報道文」「解説文」「物語」「広告文」の形式で書くことを課している。身の回りに存在する種々の文章の特徴を整理して示すことは、必要である。

十五項目以下は、各論である。手紙・報告・感想文・意見（主張）・記録・自分史などいろいろな形式の文章を書かせるように求めている。また、共同作業で、新聞・グループ雑誌・ガイドブック・パンフレット・アンケート用紙・案内状招待状・プレゼンテーションのための資料、といったものを作成するように提案し、その手だてで注意事項も含めて丁寧に説明している。

ユニークなところでは、学図3年の「漫画が開く言葉の世界」という読み物で、叫び声を絵として描く園山俊二氏

の手法を解説し、「漫画の中から音や様子に合った形が工夫されているオノマトペを探して集め、紹介し合おう。」という課題を出しているのが興味深い。二〇〇一年七月にマンガを学問研究の対象とする全国組織「日本マンガ学会」が設立されたことを、本学非常勤講師長谷邦夫先生から伺った。漫画という表現手段には今後もっと注目が集まるであらう。

三、「読むこと」に関する記述

「読むこと」の指導は、戦前の国語科教育では八〇パーセントぐらいのウエイトを占めていたが、昨今では六〇パーセントぐらいにウエイトが減少したように思われる。戦後一貫して「言語教育としての立場を重視する立場から」というお上の方針により、「作文教育」に当てる時間や「話すこと・聞くこと」に当てる時間まで示されて、相対的に「読むこと」の指導にあてる時間数が減少したことは否めない。しかし、読むことの指導は国語力の基礎を養う上で基本となるもので、文字・語彙を初めとして作文力の基礎も読むことによつて養われると言えよう。といった次第で、私は依然として「読むこと」の指導は、国語科教育の中で六〇パーセントの重みを持つていてと考えている。

表IIIは、各教科書が、説明文やコラムの形式で「読むこと」に関連した内容の記述をしている部分を拾い上げたものである。学図・三省は、各教材の後ろに「学びの窓」「学習のために」というコーナーを設け、教材読み取りのための具体的な発問を掲げており、これらの課題をこなすことにより「読む」力を養うように配慮している。その点で、東書・教出・光村とは編集方針が異なっているわけで、決して学図・三省が「読むこと」の指導について軽視している訳ではないので念のため特記しておく。

表Ⅲ「読むこと」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
読書の勧め	3									2					
構成と展開をとらえる	1														
作品の主題を考えるために	1									2					
情報を読み取る（生かす）ために	2	2	2												
言葉の意味をとらえるために		1													
視野を広げるために		2													
文学表現を読み味わい作者の思いに迫る		1												2	
優れた言語感覚を身につけるために			1												
思考を深めるために			2												
人物の心情の変化を読みとる			1							1	1				
人物像を読みとろう										1					
文章の内容をとらえよう（小見出し）													1		
文章の要旨をとらえよう（要約）										2	1	.5			
論理の展開をとらえる										2			1		
読後の感想を手紙に書く													4		
読書アンケート															3
読むことは生きること										2					
読んだ事柄をもとに思考を深める										3					
場面を絵にかいて読もう										1					
虚構の世界（ファンタジー）への誘い										2					
視点をとらえる（語り手・登場人物）										1					
感想交流会を開く													3		
自分だけの「一冊」を見つけよう										8					
本の帯を作ろう		1					1								
図書館を利用しよう（図書の検索）							2						1		

表III-2「文学的文章」掲載一覧

(数字は頁数)

	出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
走れメロス	太宰 治		22			26			27			23			23	
故郷	魯 迅			18			23			22			22			20
*少年の日の思い出	ヘルマン=ヘッセ					18			16			16			16	
字のない葉書	向田邦子					8									6	
ごはん	向田邦子			13												
握手	井上ひさし						15									16
さんちき	吉橋通夫	18														
ぬすびと面	吉橋通夫					22										
そこに僕はいた	辻 仁成	14														
新聞少年の歌	辻 仁成										13					
僕の防空壕	野坂昭如		18													
風になったお母さん	野坂昭如									12						
ふる場の散髪—続岳物語	椎名 誠					13										
風景から学んだこと	椎名 誠									11						
水曜日のクッキー	内海隆一郎					17										
小さな手袋	内海隆一郎								17							
アルベルト	トーベ=ヤンソン					13										
猫	トーベ=ヤンソン									13						
ボランティア、はじめの一歩	黒柳徹子							6								
タンザニアの…言葉	黒柳徹子												4			
竜	今江祥智							13								
麦わら帽子	今江祥智														10	
心のバリアフリー	乙武洋匡								12							
スーパービート板	乙武洋匡														16	
注文の多い料理店	宮沢賢治								16							
オツベルと象	宮沢賢治										19					

*三省は「クジャクヤママユ」という題になっている。

東書1年

碑 (テレビ放送番組)、広島テレビ 16。 カメレオン、チェホフ 11。

東書2年

想う、五木寛之 10。 小さな労働者、フリードマン 9。 神奈川沖浪裏、赤瀬川原平 7。 半分のふるさと、イ・サンクム 12。 ヴェロニカ、遠藤周作 7。

東書 3年

いちご同盟、三田誠広 20。

学図 1年

シェーク VS バナナ・スプリット、ウルフ＝スタルク 15。 二十年後、オー＝ヘンリー 10。

学図 2年

サーカスの馬、安岡章太郎 12。 兄やん、笹山久三 20。

フックの死―彗星物語、宮本 輝 9。 花いちもんめ、宮本 研 22。

学図 3年

最初の質問、長田 弘 4。 黒い雨、井伏鱒二 22。 種をまく人 ポール＝フライシュマン 14。 パール・ハーバーの授業 猪口邦子 8。 ケナリも花、サクラも花、鷺沢 萌 11。

夕空晴れて、伊集院静 17。 朝、三木 卓 8。

三省 1年

目撃者の眼、ジョー＝オダネル 7。 アイスキャンデー売り、立原えりか 8。

空中ブランコ乗りのキキ、別役 実 14。 トロッコ、芥川龍之介 15。

雲、あまんきみこ 20。 この小さな地球の上で、手塚治虫 10。

三省 2年

『少年H』で伝えたかったこと、妹尾河童 6。 焼け跡―『少年H』より、妹尾河童 18。 夏の庭、湯本香樹美 12。 自転車の練習、さくらももこ 8。 焼きもの、小泉和子 6。

三省 3年

未来の花たちへ、落合恵子 10。 風の色、江国香織 4。 流線型、高木隆司 6

教出 1年

ベンチ、リヒター 10。 ちょっと変じゃない？、青木やよひ 7

教出 2年

卵、長野まゆみ 9。 秘密、原田宗典 12。 夏の葬列、山川方夫 14。

「わたし」のことを知っていますか、香山リカ 7。

教出 3年

水にうかぶ桜、川上弘美 8。 素顔同盟、すやま たけし 10。 無医村の優しい人々、渡辺啓子 11。 一塁手の生還、赤瀬川隼 20。 風の旅、星野富弘 14。

光村 1年

親友、赤川次郎 11。 大人になれなかった弟たちに、米倉斉加年 12。 雪やこんこ、あられやこんこ、佐々木瑞枝 12。 ちょっと立ち止まって、桑原茂夫 7。

光村 2年

伝え合い、西江雅之 6。 マドゥーの地で、貫戸朋子 8。

ゼブラ、ハイム・ボトク 20。 物語が走る、奥脇 抄 9。

葉っぱのフレディ、レオ・バスカーリア 12。 江戸の人々と浮世絵、高橋克彦 10。

光村 3年

蟬しぐれ(抄)、藤沢周平 12。 二つの悲しみ、杉山竜丸 7。 お辞儀するひと(詩ではあるが「状況に生きる」の単元のテーマを担う一連の教材なので)、安西 均 3。 アラスカとの出会い、星野道夫 10。 温かいスープ、今道友信 6。

表Ⅲでは、文学的文章の鑑賞に関するもの、説明的文章の読解に関するもの、共通のもの、の順で掲げたが、最も注目したいのは、東書・三省の「本の帯をつくろう」というコーナーである。東書では、本の内容を印象深く紹介する方法として、本の帯を作ることを課題とし、三省では、「読書の感動を伝えよう」という読み物の中で、「帯を見た人が、その本を手にとって読んでみたくなるような短い紹介のことば（キャッチコピー）を考えます。」として、出来上がった帯を「実際の本につけて展示会を開いてみよう」と提案している。「書くこと」とも関連するが、「読むこと」の発展指導と考えこの章に入れた。

次に、表Ⅲ―2として、「文学的文章」掲載一覧を掲げた。ここには、小説のほか随筆・随想も含めた。その際、随筆と評論との境界が分明でないため、採り上げるかどうか迷うものもあった。迷うものは採り上げるという方針にし、乙武洋匡氏の『心のバリアフリー』も随筆の範疇に入れることとして採り上げた。

五社すべてが採っているのは、二年生の『走れメロス』と三年生の『故郷』である。それに、ヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』が東書を除く四社の一年生に採られている。向田邦子氏の『字のない葉書』は学図・光村に、そして『ごはん』が東書に採られている。井上ひさし氏の『握手』も学図・光村に掲載されている。以上が複数の教科書に採られている作品である。これらは全て前要領の教科書でも採られていた作品ばかりで、言わば中学国語の定番教材と言えよう。

そのほか、『竜』『オツベルと象』『サーカスの馬』『空中ブランコ乗りキキ』『アイスクャンデー売り』『トロッコ』『夏の葬列』『二墨手の生還』『大人になれなかった弟たちに』などその社の教科書では伝統のごとく掲載している作品があつて、嬉しくなる。今挙げた作品は、私が個人的に「生徒の心に響くよい教材二十選」に入れているもので、今後もうずっと掲載し続けてほしい。特に、戦争を知らない第二世代の中学生に、戦争の悲惨さを語り伝える文章は

ぜひ掲載し続けていただきたい。『黒い雨』『僕の防空壕』も同じである。ただし、野坂昭如氏の『火垂るの墓』（桐原書房国語Ⅰ）は、私の場合泣けて授業が出来なくなるので教科書に載ると困る。『いちご同盟』『ちよつと立ち止まって』も以前からおなじみである。

韻文教材について触れておく。

まず詩では、谷川俊太郎氏の作品が五社に採られている。特に『春に』は、東書・教出・光村に掲載されている。興味深いのは、東書が一年の初めに置き、春を迎え中学生になった喜びと弾む心を味わわせる教材として位置づけているのに対し、教出が三年の最後に置いて、卒業と旅立ちの春を象徴させていて、対照的な扱いとなっていることである。光村は、二年の第1単元「春を伝える」にユーミン（以下敬称を略させていただく）の『春よ、来い』と並べて掲載している。学図は『手紙』、三省は『朝のリレー』である。

吉野弘は3社が採り上げているが、採録作品は異なる。ところが、茨木のり子の作品は2社同じ『わたしが一番きれいだったとき』を掲載している。新川和江・黒田三郎とも別々の作品である。一社が採り上げている詩人については、表Ⅲの3を参照されたい。島崎藤村・高村光太郎・草野心平・中原中也・佐藤春夫・小野十三郎の名は見られるが、萩原朔太郎・室生犀星・三好達治・金子光晴・八木重吉・村野四郎の名前は見られない。代わりに新しい時代の詩人たちが登場してきた。

表Ⅲの4・5には、短歌・俳句の入門的説明文の掲載有無が分かるように表の中に示しておいた。

短歌では、与謝野晶子・斎藤茂吉が5社すべてに採られている他、石川啄木・俵万智が4社、若山牧水・寺山修司が3社と、詩と比べれば同一度が高い。

俳句の方でも、高浜虚子と種田山頭火が5社すべてに採られているほか、3社に掲載されているのは、正岡子規・

表Ⅲ-3「詩」(作者名一覧)

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
谷川俊太郎	1					1					1		1		
吉野 弘			1	1						1					
島崎藤村		1					1								
茨木のり子		1					1								
新川和江										1					1
黒田三郎					1								1		
木村信子							1		1						
東書 1年：山村暮鳥、3年：中島みゆき・高村光太郎・中原中也、 学図 1年：石原吉郎・牟礼慶子・宮沢賢治、2年：菅原克己・木坂 涼・ポール＝エ リュアル、3年：シュ ルヴィエル・小野十三郎、 三省 1年：川崎 洋、2年：高橋順子、3年：真壁 仁・峠 三吉、 教出 1年：草野心平、2年：照屋林賢・一戸謙三・佐藤春夫、3年：原 民喜(2編) 光村 2年：松任谷由美、3年：長田 弘、															

表Ⅲ-4「短歌」(作者名一覧)

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
短歌の世界							4								
短歌鑑賞の楽しみ 佐々木幸綱										7					
短歌と俳句、それぞれの表現													9		
与謝野晶子		1			1		1			2			1		
斎藤茂吉		1			1		1			3			1		
石川啄木		1					1			2			1		
俵 万智		1			1		1			*1					
若山牧水							1			2			1		
寺山修司		1			1		1								
正岡子規					1		1								
河野裕子					1		1								
栗木京子					1		1								
北原白秋							1			*1					
近藤芳美							1			*1					
学図 2年：浦母都子・永井陽子・平井 弘・釈 超空・森本明子・岡井 隆・ 草地宇山・佐々木幸綱、 三省 2年：島木赤彦・宮 柊二・李 正子、 教出 2年：塚本邦雄*・葛原妙子* 光村 2年：山川登美子・前田夕暮															

注) *は、佐々木幸綱氏の文章に引用の短歌

表Ⅲ-5「俳句」(作者名一覧)

(数字は頁数)

	出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
俳句の楽しさ	坪内稔典												6			
俳句の世界									4							
高浜虚子			1			1			1			1			1	
種田山頭火			1			1			1			1			1	
水原秋桜子			1			1						1				
飯田蛇笏			1			1			1							
正岡子規			1						1			1				
山口誓子						1						1			1	
加藤楸邨						1			1			1				
中村草田男						1			1			1				
中村汀女									1			1			1	
石田波郷									1			1			1	
村上鬼城						1						1				
学図3年：大木あまり・三橋鷹女・大野林火・高柳重信・鈴木ゆすら・三橋敏雄・中岡草人、 三省3年：杉田久女・細見綾子・池田澄子・橋本多佳子・金子兜太 教出3年：河東碧梧桐・松本たかし・星野立子・尾崎放哉、 光村3年：室生犀星・西東三鬼、																

水原秋桜子・飯田蛇笏・山口誓子・加藤楸邨・中村草田男・石田波郷・中村汀女というお馴染みの八人である。学図と三省は新しい俳句も積極的に採り上げているようだ。これに対して東書は少数精鋭というか全部で五首しか採っていないのである。

各社とも、巻末に「読書の勧め」などとして推薦書を紹介している。多いものは毎学年九十九編も挙げており、図書館の利用法やパソコンを用いて必要な本を検索することに言及している社もある。

なお、評論文や科学的読み物については今回表Ⅲに入れることを割愛した。

四、古典に関する記述について

新要領「第3指導計画の作成と内容の取扱い」の1の(4)「C読むこと」に関する指導の留意

事項に、「イ古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにし、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること。」と示されており、この記述に対応するべく各社とも工夫して「古典」の単元を設定している。掲載教材は、表Ⅳ「古典掲載作品一覧」に示す通りである。

古典については、各社の特徴があまりはつきりと出ないようである。中学で扱える難易度の古典で、内容的に興味深い作品に限りがあるからだろうか。各社とも、一年で『竹取物語』、二年で『平家物語』『徒然草』、三年生で『万葉・古今・新古今』『おくの細道』となっている。わずかに『枕草子』の掲載学年に動きがあるだけである。いろはがるた・川柳・狂言・百人一首・伊曾保物語・宇治拾遺物語などそれぞれの社の工夫も見られるが、古典全体から見れば僅かである。

『竹取物語』では、巻頭と月の使者がかぐや姫に天の羽衣を着せるところを各社とも原文（口語訳付き）で載せ、あらすじを紹介する形をとっている。『平家物語』は、学図・三省・教出が「敦盛の最期」、東書・光村は「那須与一、扇の的」である。『徒然草』は、見事に五社五様であり、同一章段が二社に採られていることはない。『枕草子』が学年は違っても「春はあけぼの」の段を必ず採っているのと対照的である。『おくの細道』は、五社ともに「冒頭」（教出は途中まで）と「平泉」を採っている。ただし、「平泉」では教出・光村は兼房の句までで、光堂を載せていない。代わりに光村は「立石寺」を載せる。

表IV「古典」掲載一覧

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
古典に親しむために (古典入門)	3			2			1			2	1		2	2	2
竹取物語	7			10			10			8			12		
枕草子	7				4		5			4			3		
徒然草		4			6		3			4			2		
平家物語		6			11		12			9			9		
万葉集・古今集・新古今集			5		4			8			10			9	
おくのほそ道			7		7			7			11			6	
宇治拾遺物語				7											
いろはがた										2					
川柳							1			1					
狂言										4					
百人一首の世界							2								
伊曾保物語							1								
矛盾	2						3			1			2		
故事成語 (矛盾以外)				5			1			2			3		
論語		2			4			2		4					
漢詩			2			5		4			4			7	
史記															5
古典を楽しむために		3													
古典を味わうために			3												
係り結び										1					
古典和歌の表現法 (枕詞など)					1										
和歌の区切れとリズム											2				
古文の言葉遣い、仮名遣い							1			3				1	
伝統芸能の世界 (能・狂言・歌舞伎)														4	
漢文の訓読					1			1			1			1	
漢文の朗読										1					1
漢詩について								1			3				

なお、光村三年の「伝統芸能の世界」という読み物は、能・狂言・歌舞伎について四頁に亘り、能舞台の図や舞台で演じる役者の写真を使って分かりやすく興味深く説明しており、国際化社会に羽ばたく二十一世紀の若者にこそ日本の「伝統芸能の世界」を外国の人たちに語れるようになって欲しいと思う私の期待に添うものである。

漢文も、一年で「故事成語」、二年で『論語』、三年で『漢詩』という構成が一般的である。『論語』の代わりに『史記』の項羽（垓下の戦い）を掲載している光村が特異なだけである。

古文の言葉遣い・仮名遣いに関する解説文は、もっと力を入れて記述して欲しい。「教材に即して必要な範囲の指導」とある新要領の要求を満たしている会社の方が少ない。中学校の段階でもう古文を嫌いになられては、高等学校の先生がお困りになるだろう。

五、「言語事項」について

ここから「言語事項」についての記述を、国語概説の項目に分けて検討を加えていく。まず、

①「音声・音韻」に関する記述について（表V—1参照）

日本語の音節の基礎単位は、ほぼ仮名文字一字にあたり、同じ長さ（一拍）で発音される。それは、撥音・促音・長音・拗音も同じである。この特徴が、五七五七七等の音数律を生み出した。

音節は、母音のみのものと、子音＋母音のものがある（拗音は除く）。

話すときには、声の表情や声の豊かさが要求され、イントネーションやプロミネンスにも気を配る必要がある。ア

表V-1「音声・音韻」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
言葉の音と意味										1					
拍（音節）、子音＋母音							1			1			1		
撥音・促音・長音・拗音							.5			1			1		
有声音・無声音					1										
声の表情、声の豊かさ					.5										
アクセント					.5		1			1					
イントネーション					1		.5								
プロミネンス					1		.5								

クセントは、語を区別するのに有効で、「日が昇る」「火が消える」「端が曲がっている」「橋が流された」「箸がころんだ」などの実例を挙げて説明する。

このような内容が、各社それぞれに掲載されているが、詳簡の差が大きいし、まだまだ不十分であると言わねばならない。特に、東書は全く「音声・音韻」に関する記述がなく、「話すこと・聞くこと」が充実していたのと比べあまりにもアンバランスである。

前回の調査¹で入れてほしいと指摘しておいた、音韻変化の法則（交替・同化・転倒）などは、授業時間数の削減で掲載する余裕など全然無いのが実状である。

②「文字」に関する記述について（表V-2参照）

漢字に関する記述がほとんどである。漢字以前の文字学として、「世界の文字」（文字の種類）、「文字の三要素」（形音義）、「日本で使われる文字」について低学年で解説してほしい。

「漢字」についての記述は、各社とも採り上げている項目と、それぞれの社が工夫して掲載している独自項目とに分けられる。

どの教科書にもほぼ共通している項目は、明朝体や教科書体などの字

表 V-2 「文字」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
世界の文字(表意文字、表音文字)					2										
日本語で使われる文字				1					1						
漢字の起こりと変遷(甲骨文字)				1											
字体(明朝体・教科書体)	1						1			1			1		
漢字の成り立ち(六書)		3		2			3			1			2		
漢字の部首(偏旁冠脚繞垂構)	2	1	.5	3			3			2			4		
筆順	1									1					
漢字の画数	1						.5			1					
字音・字訓		.5			2		1	1		1	.5		2		2
熟字訓					1			1			1		1		.5
呉音・漢音・唐音										2					
同音異字・同訓異字	1	.5	2			2		4	.5	3	1		1	2	2
複数の字音・字訓をもつ漢字														1	
複数の意味を持つ漢字											.5		1		
重箱読み、湯桶読み					1					1					1
読み方によって別語となる熟語	.5							1					1		
反対の意味の漢字	.5														
二字熟語作り	1	1	.5	1	1	1	2	1	2	2	1	.5	3		
四字熟語作り		.5	1			1			2			.5	1	1	
三字の熟語の組み立て								1		.5	1		1		
字形の似た文字(綱と網)		1			1							2	1		3
形声文字の特徴		1			2							.5		3	
助数詞に用いる漢字			1												
() に漢字を入れて諺を完成させる		.5													
平仮名・片仮名の起こり					2		1								
特別な用語に使われる漢字(壱円)					2										
接頭語・接尾語になる漢字(不・的)										.5			1		
送り仮名														2	1
特定のものを表す言葉(漢字)														1	
漢字の使い方に慣れよう(総合的)														10	10
常用漢字表の性格と漢字の字数															3
国字・国訓															2
読み方の変化する漢字(連声など)											1				
点字					1		2			1					
手話(指文字)					1		2								

体・六書・部首・画数・音と訓・同音異字・同訓異字・字形の似た文字・熟字訓・重箱読み湯桶読み・多義を有する文字・二字三字四字の熟語である。六書のうち「形成文字」の「意味を表す部分」と「音を表す部分」との位置関係についても四社で採り上げている。これらは、漢字についての必須知識である。

二社しか採り上げていない項目ではあるが、筆順・平仮名片仮名の起こりについても、全ての社で採り上げてほしい項目である。また、新教科書で初めて採り上げられた、「点字」と「手話（指文字）」も福祉国家の国民として知っておくべき事項である。

次に、それぞれの社の工夫を紹介する。

東書三年は、「ものを数えるときの単位」となる漢字、一尺（長さ）・一首（短歌）・一足（靴）などを採り上げ、説明と設問とで一頁とっている。

学図一年では、「漢字の起こりと変遷」として「甲骨文字・金文・篆書・隸書・楷書・行書・草書」を説明している。学図三年は、「特別な用語に使われる漢字」と題して、常用漢字一九四五字の中に特別な語や専門用語として用いられるものがあると説明して十に分類している。（一）内に例を一字だけ示して掲げる。度量衡（畝）・医学（泌）・科学（硝）・数や順序（毫）・官位や称号（爵）・法律経済（遵）・動植物（鯨）・建築物（溝）・宗教芸術（塑）。

教出二年では、「漢字の音にも歴史がある」と題して、呉音・漢音・唐音を説明し、設問で確かめさせている。教出三年では、「呼応はオウで反応はノウ」という見出しで、連声・連濁と言う国語学用語は使わずに、「東十西」で「トウザイ」、「寒十風」で「カンブウ」、「がく十こう」は「ガッコウ」など、例や設問で「読み方の変化する漢字」として学ばせるように工夫している。

光村二年では、「鏡に顔を映す」と「夕日に映える」のように複数の訓や、「兎」を「ジ・ニ」と読むように複数の

音を持つ漢字を挙げて説明している。三年では「国字・国訓」について説明している。

どの社も、漢字に興味を持てるように配慮した工夫が凝らされている。たとえば、漢字のしりとり遊び、漢字の迷路、漢字のパズルなどである。ここでも、国語教科書の脱皮を印象づけられた。

なお、どの社の教科書にも掲載されている「常用漢字表」「新出漢字一覧」は、この表Vの2には入れなかった。

③「語彙」に関する記述について（表V—3参照）

語彙について、新要領は次のように記している。

第1学年

イ 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意すること。

ウ 事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもつこと。

第2・3学年

イ 慣用句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句の意味や用法に注意すること。

ウ 抽象的な概念などを表す多様な語句についての理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにすること。

これを受けて、各社とも「辞書に親しもう」のコーナーを設けて、「辞書的な意味」を調べ、教材文章中の「文脈上の意味」を捉えるように配慮しているし、表に示すように「慣用句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句」については、意を用いていることが窺える。なお、「語源調べ」は一社も探り上げていない。

次に、各社独自の工夫を紹介する。

学図では、巻末に「言語の学習」という単元を設定し、「一年の語彙・語句の学習」の「5意味の派生」という見出しでは、「基本的な意味」から「派生的な意味」が生ずることを説明している。また、語の分類方法の一つに「意味に

表V-3「語彙」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
辞書に親しもう、語の意味	2			2			4						2	3	
和語・漢語・外来語・混種語		3		3			.5		1				4		
類義語・対義語		3			4		3			4			2	1	
漢語(熟語)の構成(組み立て)			2	2			2			.5	.5		1	3	
語の構成……漢語以外にも言及											4				
同音異義語・多義語			3	1	.5			1			1	1	1	1	2
意味の派生				1											
慣用句・故事成語・ことわざ			3	2				2		1				1	
意味と文法的性質による分類				2											
上位語・下位語					1										
特定分野で使われる語						2									
単純語・合成語(複合語・派生語)						4									
擬声語・擬態語							1								
難解漢語を易しい語に言い換える														1	
決まった言い回しで使われる語句														1	

よる分類」のあることを『分類語彙表』で説明している。二年で、「すずめ・鳥・動物」を例にとり、表す意味の広さによって上位語と下位語の区別があることを解説している。

学図三年で、「単語は単純語と合成語に分けられる。合成語はさらに複合語と派生語に分けられる」ことを示して、複合語の造語成分やそれらの関係にまで触れているのは、中学生にはやや高度かもしれないが言葉に関心のある生徒には学ぶ意欲をかきたてる効果があるだろう。

教出三年では、「語の構成」と題して、「山登り」と「登山」の語を構成する部分どうしの関係を調べることから、熟語の構成には、「A主語＋述語、B修飾語＋被修飾語、C述語＋客・補語、D前語＋類義語、E前語＋対義語、F置語」の六種類あることを例を挙げて説明している。

三省一年では、「ことばのコラム」で「擬声

語・擬態語」を採り上げている。第七单元に「食感のオノマトペ」という読み物を掲載していることと相呼応している、一つの見識を示している。

④「文法」に関する記述について（表V—4参照）

文法に関する新要領の要求は、私に整序して示すと次のようになる。

ア 話や文章の中の段落の役割や文と文との接続関係などを考えること。……文章論

イ 文の中の文の成分の順序や照応、文の組立てなどについて考えること。……文論

ウ 単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同一ような働きをもつ語句などに注意すること。

エ 単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること。……以上語論・品詞論

オ 話し言葉と書き言葉との違いについて理解し、適切に使うこと。

カ 共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにすること。

キ 国語の特質を理解させるために、ある程度まとまった知識を得させる指導にも配慮すること。その場合、日常の言語活動を振り返り言葉のきまりについて気付かせ、言語生活の向上に役立てることを重視するとともに、必要以上に細部にわたったり形式的になつたりしないようにすること。

右の要求に対応するべく、各社ともにア～キを網羅するようにきめ細かな配慮・工夫が窺われる。

まず、文法に興味と関心を持たせるべく、「言葉に関するきまりが文法」（東書）、「言葉のつなぎ方のきまり」（学図）などと、「文法とは何か、なぜ文法を学ぶことが必要なのか」を説明する文法入門コーナーを設定している。

表V-4「文法」に関する叙述

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
文法とは/言葉の単位(文節・単語)	4	1	1	2			4		1	5		1	5		
文の成分(主語・述語・修飾語等)	6	3	3	5		6	7		1	9	7	3	8	2	
単語の分類(自立語・付属語・品詞)	7	6	6	4			2		1	4				4	
名詞・代名詞				4			2		1	5		.5		1	
指示する言葉(こそあど)	3			1			1			3			3		
副詞・連体詞				4			4	.5	3		.3		.5		
接続する言葉(含接続詞・感動詞)	2			5			1	2	.5	4		.2	4	.5	
用言のはたらきと活用		6	4	9			2	10	1	1	11	1		7	
付属語の定義、説明					1				1				1		
助詞のはたらき		4	2		6			5		10	1		3		
助動詞のはたらき		6	4		5			8		6			3		
敬語のはたらき			5		*			4			5			4	
あいまいな表現(修飾語の位置等)			5		*			3							
紛らわしい品詞		3													
単文・複文・重文					1										
文末の表現(命令・依頼・推量…)					2										
文章の構造(段落どうしの関係)					3	1									
意味と文法(状態を表す動詞等)														4	
表現の視点(やる・もらう等)														4	
呼応の表現・文末表現														4	
考える文法(Q&A)														8	
品詞の転成										1					
評価の表現(珍しい、みごとだ)											2				
倒置(付、文の組み立て)										1	.5				
「は」のはたらき											4				
打ち消しの表現											4				
古典の仮名遣い				1											
五十音図(含ローマ字)	2						.5			.5				2	
品詞分類表	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	
用言の活用表	1	2	1	3	2	2		2	2			1	2	2	2
助動詞の活用表		2	2		1	1			1		2	2	1	2	2
助詞一覧表		1	1		1	1									

注) *表VI「言語に関する読み物」に収録

文章論は、作文の方で述べているので重複をさけたのか、文法として段落どうしの関係について記しているのは、学図・三省だけである。

文論（文の組み立て、文節と文節の関係）については、各社ともかなりの頁を使ってしっかり記述している。

語論（品詞論）では、まず品詞分類の基準について全ての社が記し、「品詞分類表」を光村・教出の三年以外は各学年で掲載している。前要領準拠版では、「品詞分類表」を掲載していないものの方が断然多く、旧稿で掲載の必要性を強調したことを思うと、隔世の感がある。品詞論の各論では、概ね一年で活用のない自立語を学び、用言は二年、助動詞・助詞は三年でマスターさせるといのが標準となつていようである。教出・光村は、付属語も二年で教えることにしている。各社とも文法を体系的に教えようという意識が窺える編集となつていて好ましい。

指導要領に示す「ある程度まとまった知識を得させる指導にも配慮する」（この表現は既に昭和五二年版にあつて、旧稿で文法体系指導の必要性を強調した）ことが、二十年経つてようやく実際の教科書の中に具現した。

「話し言葉と書き言葉との違いについて」は一年（表VIも参照）、「共通語と方言の果たす役割」は二年、「敬語」については三年で各社とも採り上げている。

次に、各社独自の工夫が見られる箇所を紹介する。東書三年では、巻末の「三年の文法のまとめ」で、「紛らわしい品詞」として「時間がない・寒くない・忘れない」の「ない」がそれぞれ別の品詞であること等を、三頁使つて例を示しながら説明して、かなり高度な内容である。

学図三年は、巻末「言語の学習」の「三年生の文法の学習」の「三 複雑な文の構造」の2で「単文・複文・重文」、「四 文末の表現」で「A他に要求する表現（命令・依頼・義務・許容・禁止、質問・反問）」「B他に要求しない表現（判断・推量・伝聞・感動の表現）」と整理して例を挙げながら説明している。

教出一年では、巻末の「言葉のきまり」で一通り文論・品詞論の紹介をした後、「品詞の転成」という一頁のコーナーを掲載し、「走る」↓「走り」（動詞↓名詞）「楽しい」↓「楽しむ」（形容詞↓動詞）などの例を挙げて説明している。三年でも独自の工夫が見られる。

光村三年では、巻末近くの「考える文法」が出色だ。Q & A形式で「助動詞の相互承接」「能動文と受け身文の動作主・受け手の関係」など一〇のQを設定して解説している。発展的学習と言った感じで、言語に関心のある熱心な生徒の学ぶ意欲を掻き立てるであろう。

⑤ 「言語」に関する読み物（表VI参照）

「言語」に関する読み物の掲載状況は、「表VI」のごとくである。筆者名がないのは、各社の教科書編集委員会の執筆である。この中で、「話し言葉と書き言葉」「共通語と方言」「敬語」についての解説文は、新要領に規定されている事項である。

その他の読み物は、学習者が言葉に興味と関心を持つてくれるようにと、各社がそれぞれ工夫して掲載したものである。私の個人的関心から言うと、東書三年の「万葉集を当時の音で読む」という城生伯太郎の文章がおもしろい。中学生が音韻変化や日本語の歴史に興味を持つ、そのきっかけになることを期待できる教材である。

六、「情報」関係の教材（表VII参照）

新要領で新しく採り上げられた項目に「情報」関係の記述がある。中学校学習指導要領第二学年及び第三学年の「1

表VI「言語」に関する読み物

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
話し方はどうかな 川上裕之	6														
話し言葉と書き言葉	2			4			2			4			4		
方言のクッション 俵 万智	7														
ことばが輝くとき 俵 万智								8							
方言と共通語		2			4			4			4			4	
カタカナ抜きで話せますか 陣内正敬	6														
万葉集を当時の音で読む 城生伯太郎		5													
片言を言うまで 金田一京助				11											
言葉の意味はだれが決める 永井均					7										
言葉の力 (解説)					2										
言葉は広がる 鶴見俊輔					13										
言葉との出会い						2									
敬語 金田 弘					4										
言葉で伝えよう													7		
比喩のしかた、比喩の効果							1						3		
言葉の変化														3	
言葉の力 大岡 信														4	
詩が生まれるとき 吉野 弘															4
日本語は乱れているか 小池 保															4
日本語の特徴															4
言葉を考える															2
人はなぜ書くのか 汐見稔幸											10				
食感のオノマトペ 早川文代							6								
「ありがとう」と言わない重さ 呉人 恵									14						
世界の「あいさつ」									2						
ことばを旅する (ひろがる読書)									8						

・筆者名のないものは各社編集委員会の書き下ろし。

表Ⅶ「情報」関係の教材

(数字は頁数)

出版社	東書			学図			三省			教出			光村		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
必要な情報を得る（書籍・新聞・インターネット、電子メール）							2			5			1	2	
通信文を送る（電子メールなど）			2												
情報を読み取るために	2														
情報を生かすために		2													
情報化社会を生きるために			3												
テレビとの付き合い方 佐藤二雄			6												
情報の奥にふみ込む 情報のせいり				2											
*情報をほり起こす コピーライターの技				2											
情報化する表現の中で				2											
*発想の交差と発掘 プレーンストーミング				2											
情報は万全か 情報の吟味					2										
図書を検索しよう							2								
+アンケートをしよう							2								
*インタビューをしよう							2								
情報の整理と活用								2							
参考文献と引用								2							
メディアとわたしたち 見城武秀								12							
図書館は情報センター									3						
情報社会を生きる 半田智久										11					
+集めた情報をもとに、意見文を書く													4		
マスメディアを通じた現実世界 池田謙一														11	
パソコン通信というコミュニケーション 俵 万智														7	
メディアとのかかわりを見直そう														5	

注）* 表Ⅰと重複掲載。 + 表Ⅱと重複掲載。

目標」の(3)に「目的や意図に応じて文章を読み、広い範囲から情報を集め、効果的に活用する能力を身に付けさせるとともに、読書を生活に役立て自己を向上させようとする態度を育てる。」とあり、国語科においても情報社会に対応できるような対策が必要となった。

そこで、表VIのように「情報」関係のコラム的読み物や、図書館の情報検索の利用などに関連した記述が見られるようになった。この項目については、まだ手探りの状態であるらしく、出版社による差異が大きい。また、学図以外の四社は、「読むこと」指導のための説明文教材の題材を、「情報」に関連したことを論じたものにする(筆者名の記されたもの)といった配慮をしている。

おわりに

以上、中学校用の新国語科教科書を比較し検討を加えてきたが、総合的に見て十年前の平成元年版指導要領準拠の教科書と比べ、格段に進歩したというのが実感である。個々の事柄は各章の記述を参照いただくとして、最後に私の希望を述べて結びとしたい。

教科書はあまり薄くはなっていない。むしろ資料や付録は充実した。これだけのことを中学校できつちりと指導してくだされば、高等学校の国語科の授業はさらに充実するだろう。

しかし、授業時間は各学年ともに週あたり1時間ずつ減った。すなわち、前要領では五・四・四であったのが、新要領では四・三・三となったのである。選択の時間で少しは埋め合わせるとしても、この授業時間の削減はどう対処しようもない数字である。いくら教科書が進化し良くなっても、授業時間数が絶対的に不足する現状では、せっかく

の良い教材のいくつかには全く触れることなく三月の終業式を迎えることになってしまっただろう。

有馬元東大総長が文部大臣のときに告示された新要領が、学力低下を間違はなく招来するような極端な授業時間数の削減を行ったことを嘆かわしく思っている。すべての教科の、いや人間としての教養の基礎である国語科の授業時間は、せめて昭和五十二年版指導要領の週あたり五・五・五に戻していただきたい。

注

- (1) 拙稿「中学校国語科用新教科書の〔言語事項〕に関する記述の問題点」〔槌山国文学〕第十八号、平成六年三月。
- (2) 拙稿「中学校国語科教科書における〔言語事項〕に関する記述の問題点」〔槌山国文学〕第十号、昭和六十一年三月。